

神様と私だけのG・Iで
世界を救いたい

ぱすたげってい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

安藤伊吹はこのたび日頃の不摂生が祟り死んでしまいました

神様に出会いH×Hの世界へと転生させていただけることになりました

あれ？なんか体がおかしいのですが、ありや、なんか記憶が？

簡単に言うとH×Hのグリードアイランドに出てきたカード類とカメレオンみたいなアイツの持っていた透明になる能力に似た力を神様からもらった主人公が転生してH×H世界で頑張るらしい？

そんな感じのものがたり

初投稿&不定期更新です、完結できるように頑張ります

目次

神様の世界はとかくチビシーものなので	
ある	1
空から少女が落ちてきたというわけでは	
ない	23
彼は犯罪者でも人さらいでも物盗りでも	
ない	31
その液体は白くてドロドロしててコクの	
ある	48

神様の世界はとかくチビシーものなのである

……スケ……オネガ……マス……

……スケテ……スケ……ケ……テ……

……タスケ……ロ……ス……コロス……

「あーあ、また壊れちゃってるし、ドス黒いのばかり」

おへそ丸出しのネグリジエに身を包んだ、残念なスタイルの金髪ストレートの少女は
そう呟いた。

ーブチツ

少女は漂ってきた黒いソレを掴んで握りつぶす。

「あー！ほんとーにどうにかしないとなあ、このまま続いたら過労死で死んじゃうよ！」

―ブチッ、―ブチッ

―ブチッ、―ブチッ、―ブチッ

―ブチッ、―ブチッ、―ブチッ、―ブチッ、―ブチッ

―ブチッ！

「うがああああああああああああああああああ!!!もうやってらんないよ！なんなんだよこの世界！人死にすぎだし！ゴキブリかつての！」

少女は心底疲れ切っていた、自分しかない空間、大量の黒いソレに囲まれ少女は頭がどうにかなりそうだった、もう発狂寸前、爆発5秒前。そんな疲れ切った少女が頭を抱えようとしたその時、目の前にきらきらと輝くソレが飛び込んできた。∴少女はソレに目を奪われた、久しく見ていなかったとても綺麗なソレに。

「ああ．．．きれいな．．．こんな綺麗なまだあったんだ．．．」

少女は輝くソレに目を奪われたがすぐにある考えに思い至った。

(．．．う．．．これ絶対他のところから紛れ込んできたものだよね、ここに来るには綺麗すぎるし、∴他のところだとそう珍しいものじゃないらしいけどね)

光り輝くソレに少女が手をかざすと、少し驚いた表情をした後、少女はニッコリとほほ笑んだ。

「・・・あー！いいこと考えちゃった、この子使えるかも！ねえねえ！おーい！お目覚めの時間ですよー、おーきーてー」

少女はソレ伊吹に語り掛ける。

（なんだ？何か声が聞こえる？）

「あー、おはよー」

（おはようございます、って声が出ない?!）

「あなたはアンドウイブキ君で合ってるよね？30歳男性、仕事は古本屋さんで趣味はゲームとアニメグッズ収集」

（そうだけどあなたは誰ですかね？返事したいけど。うーん、声が出せないし目も開けられないし体も動かせない、困ったな、どうしよう）

「あー、驚かないで聞いてね？君は死んじゃってるんだよ、そして私は神と呼ばれている存在なんだ」

そう言いつつ少女はソレ伊吹を撫でつつ自分の目の前に持ってきた。

（俺死んでるの？マジか、いつの間に死んじゃってるんだよ俺・・・って神様?!ここ天国なの？）

「病気で死亡とあるね、まあ割と今となってはどうでもいい話かもね、君死んじゃってる

し」

（わお・・・やはり日頃の不摂生が祟ったのか？お腹も出てきてたのに運動もせず、食べ物もコンビニ弁当やカップ麺ばかり、おまけに寝るなら趣味や仕事を優先するから睡眠もあまりとつてなかった気がするし・・・それにしてもいい声だな・・・）

「まあそれは置いといて・・・」からが本題なんだけど君にちよつとお願いがあつてね、私の話を聞いてほしいんだ」

（話？話くらいいくらでも聞きますよ？神様の声を聞いたらわかる、絶対美人のお姉さんだ、少し甘めのお姉さん系ボイスだから絶対おっぱいおつきい美女だと思うんだ、まあ見えないんですけどね！）

「言い忘れてたけど君の思っていることはさつきから私に筒抜けだからね？」

○

少女のその言葉に動揺したのかソレは少し揺れながらふよふよと漂い少女の胸へと収まった。少女は抱きかかえるようにしてソレに語り掛ける。

「まあ君がえつちだろうが何だろうがいいよ、簡単に言うとお私のお仕事を手伝つてほしいんだ。神様っていうのはそれぞれ担当する世界を持っているの。輪廻転生つてわかるかな？死んだりして戻ってきた魂から記憶を消して、また新たな体に魂を与えて転生させるんだけど、私の担当する世界は想像以上に魂が穢れて帰ってきてね、穢れがたま

ると真つ黒になって、新しく生まれ変わる時に使えなくなっちゃうんだ」

(ふむふむ)

「本来は穢れはゆつくり進んでいくものなんだ、本来ここまで多くの魂が黒く穢れて帰ってくることは少ないの、でもこの世界は違う」

(なんで穢れて帰ってきちゃうんですか?)

「私にも詳細は分からないんだけどね、穢れる原因は3つあるんだ、1つは人を殺すこと、これをしてしまった魂は真つ黒になって使い物にならなくなる。2つ目は人に殺されること、強い恨みを持って死んでしまうとそれだけ魂を黒く穢れてしまうんだ。3つ目は子供を作ること、これは子供に親の魂を分け与えているからといっていいかな、生まれてくる子供に私は魂を入れるんだけどその入れる魂の浄化に親の魂を使うんだ、だから子供に入れる魂が黒くなっていればそれを浄化するのに親の魂の力がある、その分親の魂が黒くなってしまうんだ。両親で仲良くんぶんこだね。けど殺人などを犯して黒くなってしまっている魂を持つもの同士が生んだ子供には本来浄化に使う魂の輝きがなくなってるよね?そういうときにストックしてある新しい魂を使うんだけどね、予想より多すぎてもう予備が少なくなってきたらいいんだ。」

(なるほど、つまり人が多く殺されすぎる世界ってことなんですか)

「うん、想定していたよりもずっと速いペースでね、そして私は魂を作ることにはできない

んだ、私たちにも上司にあたる存在がいてね、その神様しか作れないんだけど想定していたよりずっと速いペースだから次にこの世界に補充を予定していた魂が作られるまでこの世界を維持できそうにないんだ」

（世界の破滅ってことですか？）

「そうだね、で、神様にお願ひしたんだけど激務でね、こつちまでなかなか手が回らないみたいなんだ。でも神様はこの世界を気に入っててね、何年たつてもいいから世界の破滅ではなく終わるまで見届けたらいいって言うてるんだよ、ぶつちやけると私が死ぬ時がこの世界の終わりなんだよ、だから出来ない私は消えちゃうんだ・・・」

（上司・・・なんだか神様界も闇が深いな・・・そしてかなりやばい状況なのでは？大丈夫なんですか？）

「あはは・・・。それで君にお願ひなの、少しでいいの！手助けてしてほしい」

（：そんな話を聞いちや手を貸したくなりますね、何をすればいいのですか？）

「ありていに言うと、その世界に転生して人を助けて欲しい、穢れた魂を少なくしてほしい」

（あの一、そんな人がポンポン死んじゃうような危険なところ行つて俺なんか何とか出来るとは思えないんですが）

「お願ひ・・・イブキ君・・・君しかないんだ！」

少女は胸に抱えたソレ伊吹をぎゅっと抱きしめる。

「クツ・・・！いくらお姉さん系甘々ボイスしてるからってそうホイホイ領けないぞ!? そんな世界行きたくないし行っても助けるどころかすぐ死んじやうと思えますし!）」

「大丈夫だよ、君がその世界で生き残れるように手助けしてあげる。どう? 興味出てきた?」

「 (::内容にもよりますね、その世界についてももう少し詳しく聞かせてほしいんですが)

「詳しくかあ、私は世界について見ることはできないんだけど上の神様からはH×Hの世界と呼ばれてい r (やります)・・・早ッ!」

「やりますやらせてくださいむしろ喜んでやらせていただきます! 人助け? 神助けか? なんでもいい! 出てこいやあ!」

「すごい変わり身だね、どうしたのさ一体?」

「大好きなんですH×H!あの作品を読んでいると自分も頑張って仕事しなきゃって気分させてくれるんです!」

「・・・なんか私にはすっごい皮肉に聞こえるんだけどなあ、なんでなんだろうなあ。でもありがとね、転生してくれる気になってくれて」

「いやー嬉しいですよほんと! H×Hの世界に行けるだなんて!こちらこそありがとうございますですよ! 神様ありがとうございます! 好き! 結婚して!」

「この世界を維持できたら結婚してあげるよ」

(すいません調子に乗りましたドン引きやめ・・・え？マジで？)

「いいよ、それくらい追い詰められてるんだ、本当お願い」

(マジか)

「マジだよ」

(イヤツフウウウウウウウウウウウウウウウウウウ!!!この世の春が来た!)

「あはは、君この世界のこと知っていたんだね、それなら話が早いや・・・んーと、私自身はこの世界のことを見られなくてね、私にどんな世界なのか少し教えてくれないかな？私の担当する世界に興味があってね」

(なんなりと)

「ちよつと君のことが見られるかテストしてみるね、私の・・・いやH×Hの世界にいる人物を一人思い浮かべてみて？」

(∴人物か、マチがいいかな、かわいいし好きなキャラだ)

少女は魂から魂が現在イメージしている情報を読み取る、これは少しでも濁ってしまっている魂からは絶対にできないことで、黒く濁っていると読み取れる情報は名前とどの魂に殺されたか、殺したか、どの魂から生まれたかくらいなのだ。濁るほど読み取れなくなっていく情報は増えるのだが奇跡といってもいいくらい一点の濁りもない彼

の魂からは、彼の思い描いた人物が彼女にもイメージとして伝わる。

「確かにかわいい子だね、ちよつとキツめな感じの子だけど、うん、ちゃんと伝わったよ」
(それはよかった)

「H×Hの世界ってどんなところなのかな？」

彼女は最も知りたかった部分を聞いてみた、自分の世界がどんなところなのか。ソレ^{伊吹}は順序立ててストーリーを思い浮かべる、ハンター試験編やヨークシン編、大好きなG・I編やそれ以降のお話、それらの膨大なイメージを送ると、おおむねちゃんと伝わったようだった。彼女にイメージが伝わるたびに興奮している様子だった、彼女にはこの世界は新鮮だったようだ。

(・・・とまあこんな感じかな)

「すごいよ、でも魂が穢れる理由もわかった気がする」

(そうだな、たしかにあの世界は人が死にすぎてる)

「あとは念つていうの、すごいワクワクするね」

(ああ、そうだな、俺も大好きだ)

「そうなんだ、君の好きな念能力は？」

(メレオロンの能力、男のロマン)

「じゃあ、君が使えるなら欲しい念能力は？」

(・・・そうだな、…誰かを助けられる能力・・・かな。)

「…え?…あ、うん、ありがとう…。」

少女はソレ伊吹にまたハグをしたのだった。

その後伊吹の魂の転生の準備を始めた時、2人はある事実気が付いた。

「たまにあるけど魂のサイズが他より大きい子には上の神様からの命令でね、6色ある飾りからサイズに合わせて適当な数つけてあげるんだけど、君の魂もあまり見たことがないけどたまーにいるくらい、すっごく大きいから3つ付けないといけないんだ、めんどくさいからいつもは同じ色から選んでるかな、前は2色混ぜちゃったけど、私には色以外どれもおんなじに見えるしね。君は何か色の希望はある?」

(上からの命令なら仕方ないですね、青が好きなので、あればそれで、なければ適当に付けてもらえませんか?)

少女は少し困ったように青色の飾りの入った袋を持つてくる。

「(飾りを付けて送り出した魂がほとんど黒くなって帰ってきちゃてるのは言えない

なあ・・・ゴメンね・・・伊吹君・・・」

少女が伊吹に飾りを括りつけた、普段は一番遠くに置いているためなかなかつける機会がなかった青い色の飾りを。

——瞬間、伊吹に電流走る・・・!

(おおお?何か頭の中に入り込んできた?)!

・特質系

—女神の不在証明—

呼吸を止めている間は、体が透明になり何人たりとも使用者の存在を気付けなくなる能力。

気配、人の五感での感知、果ては円での感知など、存在を知るためのあらゆる認識がスルーされ相手の意識から消えて見えなくなる

ただしそこに存在はしているため攻撃を受けるとダメージは受ける

(これメレオロンの能力なんじゃ?能力名が女神つてなってるけどほとんど一緒の能力だ!!!)

伊吹はワクワクが止まらなかつた、動けないので心だけでびよんびよん飛び跳ねる。

「へっ?・・・あつ!これつてもしかして念能力の飾りなの?!じゃあいままで送り出してきた飾りをつけた子たちが念能力を得てたのだとしたら・・・うん、たぶんだけこの飾

りをつけた念能力が転生した世界で使えるようになるかと見てよさそうだね。」

(すごいですよこれ！他にもつけていいんですか？)

「もちろん！色々あるから試してみても、付き合うよ」

少女と男の魂はワイワイとあーでもないこーでもない騒ぐ、少女にも笑顔が見える、誰かと遊ぶことも、誰かと物を選ぶことすらもしたことがなかったのだ、楽しくてしょうがない。

少女に色々な飾りをつけたり外したりして貰ったのち、伊吹は3つの飾りを選んだ。

(この3つにします)

・特質系

—女神の不在証明—

呼吸を止めている間は、体が透明になり何人たりとも使用者の存在を気付けなくなる能力。

気配、人の五感での感知、果ては円での感知など、存在を知るためのあらゆる認識がスルーされ相手の意識から消えて見えなくなる

ただしそこに存在はしているため攻撃を受けるとダメージは受ける

―女神の共犯者―

「女神の不在証明」発動中にしか効果がない

使用者が手で触れている者にも「女神の不在証明」の効果が発動する。

―女神の秘匿―

自分の所有物を透明にし気付かれなくする能力、ただし自分のものだとは認識しているものには使うことはできない

あらゆる物を認識できないようにできるが、存在はしているため物理的に破壊は可能破壊されると能力は解除され、破壊された所有物は消えてなくなる

「これは・・・君が好きだって言っていた能力だね、どうしてこの3つを選んだの?」

（本当は誰かを助けられる能力があればいいんだけど、選べるものの中でそういうのが見当たらなかつたんだ、選んだ理由としては自分が好きな能力ってのもあるけど、透明化は面白そうだし能力同士の相性も悪くないしね）

「…そっか、かつこいいいよ伊吹くん!」

（…能力のことじゃないよな、もしや飾りのことか? 自分じゃ姿が見えないからわからないけど嬉しいよ、ありがとう）

「（…そういう意味じゃないんだけどなあ）・・・じゃあ転生の準備してくるからちよつと待っててね」

（ああ、わかった）

それから少しばかりの時間が経ち、少女は伊吹を名を呼んで胸へと抱き寄せる。

「伊吹くんおまたせ！本当は指輪にしたかったんだけど今の君はそんな状態だしね、先端に付けてあげるね。あ、かわいい！私からのプレゼントだよ」

（さつきはかつこいいって言うってたのに！男にかわいいは誉め言葉じゃないぞ！…つてプレゼント？）

「まあまあ、心の中でブツクって唱えてみて」

（…え？まさかまさかまさか！ワクワクが止まらないその素敵ワードは…（ブツク）！
うおおおおおおお脳内に本が出てきた！しゅげえ！）

「私からの特別プレゼント、〔私だけのG・I〕だよ、原作通り指定ポケット100枚、フリーポケット45枚で構成されている本だよ、転生した後は実際に本がでてくるようにもできるから期待してね」

（リスキーダイス！金粉少女にキングホワイトオオクワガタ！おおフリーポケットにスperlカードもたくさん！全種類そろってるんじやなかるうか・・・あれ？数枚知らないカードがあるな）

「そうだよ、指定ポケットの大体はG・Iと効果が同じカードだけどSSランクのカードだけは効果を変えてあるんだ」

（SSランクっていうと、支配者の祝福、一坪の密林、一坪の海岸線、大天使の息吹、ブループラネットの5種類か）

「そうだね、あと2枚ほど私が追加でフリーポケットに入れているのもあるんだけどね、効果を変えているのはこのカードだよ」

『No. 000 女神様の祝福・SS-01』 神様から転生を与えられた証。特別な能力がついてくるおまけ付き。この世界の住人をできる限り助け生活することが望まれる。

『No. 001 女神の密林 SS-03』・「地母神の庭」と呼ばれる巨大な森への入り口。絶滅したとされる動物が多数生息する。どの動物も人によくなつく。

『No. 002 女神の海岸線 SS-03』・「海女神の潜窟」と呼ばれる海底洞窟への入り口。この洞窟は入る度に中の姿を変え侵入者を迷わせる、凶悪な魔獣が多数生息する

『No. 017 女神の息吹・SS-03』・一度だけ瀕死の重傷、不治の病、肉体疲労などをなんでも一息で治せるようになる。ただし念が込められたものや強力な呪いの類には効果はない。

『No. 081 メルクリウス・SS-05』・成分構成上、どの鉱物にも属さない液体でもあり金属でもある物質、賢者の石とも呼ばれる

(ほうほう、ちよつとずつだけど効果が変わってる、名前も代わってるけど)

「まあちよつとした遊び心だね、あとはフリーポケットの最後のほうを見てみて、本命は「ちよつち」

『No. 102 引き換え券・SS-∞』・「女神の息吹」と交換することができる券。「女神の息吹」のカード化限度枚数がMAXの時にのみ手に入れることができる。

『No. 21449 石・H-∞』道端にある、何のへんてつもない石。人に向かつて投げれば、そこそこのダメージは与えられる。

『No. 607 10000J H-150』最高額の紙幣。カード化を解除した場合の形状は国際通貨紙幣と全く同じ

『No. 100 世界地図 SS-∞』この世界が示されている地図。実際に行ったり、情報を仕入れることで、中身が自動的に埋まっていく魔法の地図。

『No. 1217 ガルガイダー F-185』この島の3大珍味の1つ。外見から想像できないほど繊細な味である。雌の卵には長寿の効果があると信じられている。煮ても焼いてもうまい。

（おお、ガルガイダーだ、食ってみたいな。あ、10000Jのカード化限度枚数と引き換え券のカード化限度枚数が入れ替わって引き換え券が∞になってる、あとは世界地図？これは原作になかったよな、あとは石と）

「そして注意があるんだけどカード化限度枚数、つまりそのカードに書かれている数字だね、「私だけのG-I」は、それがカードの使用回数になる、ちなみに使用回数が0になっても使えないだけでカード自体は残るからね」

（つまり大天使・・・いや女神の息吹を実質使い放題ということか）

「気が付いたね。それが私からの贈り物、引き換え券のカード化限度枚数を∞にしといたのさ！きつとみんなを救う力になるはずだよ！まあその代わり10000Jは∞じゃなくしちやつたけどね、極端に世界のお金のバランスを変える行為はしてほしくないかな、あと地図、これは使用頻度高そうだし∞にしといたよ、帰ってきたら私にも見せてね！」

（ありがとう、『私だけのG・I』大切にに使わせてもらおうよ）

「どういたしまして、もう一度説明すると指定ポケット100種類＋フリー45種で構成されてて大体は原作と同じ効果だね、うちスペルカード40種類＋フリーポケットの5種類。カードは捨てるのができないけど、アイテム化したものを消すのは消したいと思えば自由にできるよ、回数を使い切った場合でもカード自体は残数0でバインダーに残る、ただし使用はできないから気を付けてね」

（ああ、わかった）

「カードを思い浮かべながら心の中でゲインと唱えるか、バインダーにカードをセットして操作ボタンを押すかで使えるよ、まあ今は喋れないから心の中で唱えるしかないからそうしたんだけどね」

（原作だと確か声に出さなきゃいけなかったはずだから言葉を発しなくていいのは助かるな）

「No. 000のカードを使ったら転生が始まって世界に転生するよ、あとは転生する体を用意するからちよつと待っててね」

（わかった、待ってるよ。これだな、女神様の祝福）

『No. 000 女神様の祝福 SS-01』

神様から転生を与えられた証。特別な能力がついてくるおまけ付き。この世界の住

人をできる限り助け生活することが望まれる。

「さーて、あとは体を用意してつと、スタート地点はマチって子の近くになるようにしてあげようかな、びっくりするだろうなあ、あとは彼の姿に似た人物を作つてつと）」

——ドンドン！

『おーい、ちよつと探し物をしとつてなあ？調べさせてほしいんだが、おーい？』

——ドンドンドンドン！

「（…マジヤバイ、上位の神様来ちやつた！しかもこれ伊吹君探してる!?）…伊吹君！ごめん大至急転生するから準備して！」

（…んお？もう準備はできてるよ、あとはゲインするだけ。）

「オーケー、まず世界に伊吹君の入る体を作つて、ここにいる伊吹君の魂をその体に落徐々に繋げていくようにセッティングしてつと。よし！使つて伊吹君！あ、忘れないように転生完了するまではゴキ並に増えてる黒いので伊吹君を隠してつと、よし完璧！」
（よーしいくぜ！神様ありがとうございしました！行つてきます！…俺無事に帰つてきたら結婚するんだ！）」

「行つてらつしゃい伊吹君！また会おうね！」

少女は笑顔を浮かべ小さく手を振る。・・・伊吹は頭の中で唱えた。

(ゲイン)

——ドンドンドンドンドン！

「はいはい、今開けますよー！」

『とつとと開けんかいこのグズ、お、あつたあつたワシの杖』

「杖？伊吹君じゃなくて？」

『ん？イブキ君ってなんじゃ？』

「あ・・・あははは・・・！なんでもないですよー！お仕事しなきゃ！」

『…うむ、ワシも仕事に戻る、今は大変だと思うが乗り切ってくれ、期待しておるぞ』

「任せてください！」

『じゃあの。』

——
バタン！

「…ふう、びつくりしたー！いきなりくるんだもんなあ、でもイブキ君は無事送り出せそうだし、これで仕事が減ってくればいいんだけど、もう聞こえてないかもだけど頑張れ伊吹君！期待してるよ！」

もう転生が始まり残り少なくなっている伊吹の魂に彼女はエールを送った。

そして彼女が仕事に戻ろうとしたとき、彼女は重大なミスに気が付いた…いつもは転生する魂に入れることがないため、今まで気が付けなかった致命的なミス。伊吹の記憶を入れ忘れてしまっていることに。

そのことに気が付いた少女は一人叫んだ。

「ああああああ!!! やっちゃったああああああ!!! ごめんねええええ!!!」

彼女は大急ぎで記憶を転生しようとしている彼の魂へと結合させる、しかしもう転生完了までわずかの時間しか残されておらず、ほとんど結合することができなかつた。彼女が結合できたのはほんのわずかの記憶、それはこの空間での記憶、誰かを助けられる能力が欲しいと、…大好きな彼が言った後からの記憶。それも無事に結合できたかどうかかわらない。

「伊吹君…ごめんね…伊吹君…」

彼女は泣いた、自分の不甲斐なさに泣いた、彼を思つて泣いた、ただただ泣いた。

だが彼女はまだミスをしているのだ、彼女は気づいていないのだが

・：・体を作るときには『彼の思い描いたマチ』をイメージし、『彼の顔に似ている青年の近く』をスタート地点を設定してしまったことを。

空から少女が落ちてきたというわけではない

港町の海岸沿い、誰もいない石の堤防の上で彼女は目を覚ました。

周囲は真つ暗、時刻は夜なのであろう。遠くで人が生活している街の灯りや、海を見ると船の明かりが目に入る。

「転生……したのか」

ここがどこなのかはわからないが目も開けられるし言葉も話せる、声が高くなっているように感じるのや体に多少の違和感はあるが手足だつて自在に動かせる。

……転生したのだと自覚できた。

神様との会話もはつきりと思い出せる、自分はこの世界を助けるために来たのだと覚えていて。

待っていてください神様、俺頑張ります。

「さて……どうしようかな。」

辺りに人の気配もない、街からは近くもなく遠くもない、海も穏やかに波打っている

のだろう、波音は小さい。危険はなさそうだと判断し、まずは神様から貰った特別な力、それを試しに試してみることにした。

心の中で（ブック）と唱えてみた、すると左手に本が出現したのが分かる、「私だけの G・I」が出現したのだろう。本はこの暗さでは視認できないが脳内でカードのリストが表示される。

脳内カードリストの中から石を選択し心の中で（ゲイン）と唱える。

『No. 21449 石・H—∞』道端にある、何のへんてつもない石。人に向かって投げれば、そこそこのダメージは与えられる。

——目の前にカランつと音が小さな音が響いた。おそらく石が出現し地面にあつた石とぶつかり音を立てたのであろう。

脳内カードリストから石を選択して見てみる、石の使用回数は∞のままだ。

次にガルガイダーを出してみる、脳内カードリストの中からガルガイダーを選択し心の中で（ゲイン）と唱える。

『No. 1217 ガルガイダー F—185』この島の3大珍味の1つ。外見から想像できないほど繊細な味である。雌の卵には長寿の効果があると信じられている。煮

ても焼いてもうまい。

——目の前にピチピチと何かが跳ねる音がした、生きて出てくるのかガルガイ
ダー……

脳内カードリストからガルガイダーを選択して見てみる、使用回数が一つ減ってF—
184と表示されていた。

次に出てきたガルガイダーを心の中で消したいと願う。するとピチピチ跳ねていた
音は止み、ガルガイダーが跳ねていたであろう部分を手探りで探したがどこにもガルガ
イダーはいなくなっていた。

「うん、大体使い方はこれでわかったな、あとはスペルカードだけど…ちよつとここでは
テスト出来ないかな……」

そう思い「私だけのG・I」を（ブック）を唱えて消す、左手から本の感触が消えた。
「うん、「私だけのG・I」やっぱりすごい能力だ」

神様からもらった力、神様からこの力を使って人を助けてほしいといわれた力、この
世界で俺が生きていくための力。

次に能力をテストしてみることにした、しかし周りは暗闇。

とりあえず女神の不在証明を使用してみる、息を止めると確かに能力を使っている感

覚がある、ちゃんと周りから消えているのかは自分ではわからないが。

・・・どれだけ続けられるのかもついでに試してみたが記録は30秒ほどで息切れしてしまった、ダメじゃん俺・・・どんだけ肺活量ないんだよ。そりゃ不摂生で死ぬわ！悔しくなり何回かトライしたもののすべて無様な結果に終わり悲しくなってきたころ夜が明け始めた。うつすらと街への道が見え始める。

「街に行ってみますか、他の能力も試してみたいし」

イブキは街へ向けてまだ薄暗い道を歩き出したのだった——

街へ向かう道を歩いていると、遠くに一人の男性を発見した。走りながらこちらの方へへと向かってくる、ランニングをしているのだろうか。

自分も生前やっておけばよかったかな・・・と思いつつぼーっと近づいてくる男性を見る。

「あつ、そうだ」

女神の不在証明を使用して男性に気付かれるかどうかテストをしてみよう、男性が近づいたら男性に向かって手を振ってみることにした。何か反応が返ってくれば女神の

不在証明は発動していないということだろう。まあ使えている自信はあるのだが。

どんどんと近づいてくる男性、気付かれないように近場の岩の裏に回り込み男性が近づくのを感じと待つ。なにせ30秒しか息が止められないのだ。

男性の足音が聞こえてきた、よし、今だと息を止め女神の不在証明を発動させ男性の前にぎこちない笑顔を浮かべつつ手を振りながら躍り出る。

…さてどんな人なんでしょうかね？ちらつと男性の顔を見てみる。

(・?!?!?)

…?!!んくうはあああああああああ!?胸の動悸が止まらない、これが恋・?!?!恋なのか?思わずダンスを踊っちまいそうだ!いやまで相手は男性、俺はノーマル!いたってノーマル!そんな趣味はない!断じてない!ダンジネス許さないぞ!やばいよおー頭がフットウーしそうだよ!トウククトウク止まらないようおー!心のダム崩壊しました。もうあと濡れるだけです!決壊イー!

っ・・・息がっ!

ヤバイ、本当に意識が朦朧としてきた・・・

ドサッ

ドサッ

ん？すぐ後ろでなんかが倒れたような音がした？

ハンターになるために始めた毎朝のランニング、そのランニングの途中、急に後ろから物音がしたのだ。

だがおかしい、すぐ後ろにそんな物音がしそうなものはなかったはずだ、現に通り過ぎた時には何もなかった。

違和感を覚え振り向くとそこには紫桃の髪をした同い年くらいの若い女性が横を向き倒れていた。

「は？」

現状を認識できなかった、たしかにそこには誰もいなかったはずなのだ。

しかし現に若い女が一人倒れている、美人だ、胸も結構・・いやいや今はそれどころじゃねえ！

「おい！ネーチャン大丈夫か？おい?!」

自分だつて医者のお卵だ、ちよつとした診断くらいならできる。まずは脇道へと頭を動かさないように彼女を引きずり、呼吸が楽になるように仰向けに寝かせた。

意識はないが大きな外傷はなし、安定して呼吸を始めている。∴原因が病気とかの場合だとすぐに危険というわけではないだろうがどうなるかはわからない、とりあえず様子見か。

今日はハンター試験を申し込むために帰ったら書類を書こうと思っていた、しかし見捨てるわけにはいかないだろう。

しばらくしたら目を覚ますだろうが、ここに置いていくには危ない、相手は若い女性なのだ。

彼はしばらく彼女が起きるまでその寝顔を満喫することにした。

それがイブ彼キ女との出会いだった。

彼は犯罪者でも人さらいでも物盗りでもない

「そろそろ起きてくれませんかね……もしもーし……」

彼女を見守つてからすでに3時間ほどが経っている、最初こそ綺麗な寝顔や息をするたび上下に揺れるたわわに実った果実を眺めて楽しんでたが時刻はもう朝、港町ゆえにこの道を利用する者も多く人の視線が痛い。やめろその視線、オレはなんもやつちやいねえ！

……そこへレオリオをよく知る人物がやってきた、レオリオと同年のあまり特徴のない青年、彼の父親は港町で老舗の宿屋を営んでいる。

「あれ？何やってんのさレオリオ？……誰その女の人？ま……まさか……」

そう言う青年は一步後ずさる、レオリオには腕力で勝てないことは以前喧嘩したときに青年は知っている、本当にレオリオが○なことをしているのであれば早く街に行つて応援を呼びにいかないといけない、……まあそんなことはないと思つてはいるのだが。

「待て待て！お前といいこれまでに街から来たやつらといい俺のことなんだと思つてんだ！」

レオリオは激昂した、しかしすぐに怒りは収まり自分はそんなにヤバい奴だと思われ

ていたのかと思ひしよんぼりとしている。

「ごめんごめんレオリオ、みんなからかつてるだけだと思ふよ？ 僕だつて本気で言つてないさ・・・ところでレオリオ、その人どうしたんだい？」

青年はそんなレオリオを見て悪い悪いというポーズを取り近づいていく、彼とて本当にレオリオが○なことをしでかすとは思つていない、そうせねばならない何かがあつたのだろう。

レオリオは近づいてきた青年に今までの経緯を話す、するとハツと気が付いた青年はレオリオに言った。

「この人、うちの町で見たことない人だよね、これだけ美人だし…特にレオリオ、君が知らないなんてことはないと思う。たぶん他のところから来た人だと思ふけど荷物も何も持つてないところを見るにどこかに泊まつてると思ふんだけど…。この街は港町だから宿屋も多いけど僕なら他の宿屋にも顔がきくしね、どこに泊まつていのか聞いてきてあげるよ」

レオリオは確かに、と頷いた。このままここにいてもラチが明かないのは事実、容態も安定しているしもう心配はないだろう。任せたと一言頼み青年を待つことにした。

——また一時間ほどして青年は戻つてきたが表情は明るいものではなかつた。

「ごめんレオリオ、この街の3つの宿屋全部に聞いたんだけどそんな人は泊まっていな
いんだって、困ったなあ、だとすると宿屋以外に泊まっているか、そもそも身軽だった
か・・・考えたくはないけど物盗りに盗られちゃったかとかかな？」

：なるほど確かに、個人の家に泊まっているのであれば何も問題はないが問題は物盗
りにあつてしまつていた時だ、旅人だったのだとしたら大問題だろう。

そう思い至り、レオリオはまたしばし考えたが目が覚めるまで自分の家に寝かせるこ
とにした、若い女性を意識がないうちに自宅へ連れ込む、完全に誤解される状況だが何
か勘違いされたり訴えられても青年という証人がいる。いざというときは青年を頼ろ
う。

「なあ？悪いけどこの人俺の家まで運ぶのについてきてくれねえか？頼む」

青年はしようがないなあ、と言いつつどこか嬉しそうに頷くのだった。

レオリオの家へと青年と3人で帰る帰り道、レオリオはおんぶの形で道で倒れた女を

運んでいたため道で会う人々に散々冷やかされたが無事運びきり女を自室のベッドへと横たえた。

そしてその後宿屋の青年に頼み、青年と付き合っている彼女を呼んでもらった、レオリオとも同い年で青年と同じく旧知の仲だ、目が覚めたら知らない部屋で男と2人だという状況は女性には酷だろうという判断によるものだ、彼女にそう遅くない時間に目が覚めるだろうから目が覚めたら伝えてほしいと頼むと快くOKしてくれた、やつば良いやつ：少し青年が羨ましい。

——レオリオが遅い朝食、ブランチと言うべきか：。パンとちよつとしたサラダを食べていると青年がやつてきた、彼は最近の乗船記録から女について何かわからないか調べてもらっていたが、何もわからなかったそうだ。

：まあそろそろ彼女も目覚めるだろう、その時に話をすればいいさ、もし物盗りにあつていたら少しばかり手助けしてやろう、今はあまり金がないため金がかかること以外で、だが。

青年は仕事があるからと彼女によろしくねと一言告げて出て行つた。彼女まで駆り立ててしまったんだ、金ができたらうまい飯でもおごつてやろう。

それから昼に差し掛かるうかとした時間になったとき、自室のドアが開いた。

中を見ると道で倒れていた女がベッドに腰かけて起きていた、彼女は女にここまでの

経緯を伝えてくれたらしい、話を聞く限り物盗りとかでもなかったようだ。少し安心し息を吐くと彼女がうまくやんなよと肩を叩き出て行った、余計なお世話だ。

俺が目を覚ますと心配そうに女の人がこちらを見ていた

「あつ！気が付いたね」

—— だんだん意識がはつきりしてくる。・・・そうだ！俺は能力を使ってる最中にぶつ倒れたんだった！

ベッドからガバツと飛び起きベッドの上に正座で座りこみ、近くの椅子に座っている若い女性に問いかける。

「あなたが助けてくれたんですか？」

「いんや、助けたのは私の彼氏とレオリオって奴だよ、2人がここまで連れてきたんだ。私は頼まれてあんたを診ていただけだね」

「…そうなんですか、ありがとうございませう、ご迷惑をおかけしました」

「例なら2人に言ってくれよ、あたしはなーんにもしてないんだからさ」

「それでもです、ありがとうございますごさいました」

「…俺はペコリ、と頭を下げる

「いいってほんとに。…そうだいあんた、大丈夫なの？どつか痛いとかないか？物盗りにあつたりとかは？」

「そう言い彼女は心配そうに顔を近づけてくる、ヤバイヤバイ、近いから！息遣いがががが！」

「だだだ大丈夫です！物盗りとかも会ってません！もともと大したものは何も持ってませんでしたし！」

「そう言つて距離を取る、危ない危ない。」

「そうかい？それなら良かった、あんたが起きたつてレオリオに伝えてきてもいいかい？あたしもあんたが起きたんならそろそろ仕事に戻りたいからね」

「本当にありがとうごさいました、はい、レオリオさんにも感謝を伝えたいのでお願いします」

「わかつたよ、じゃあね、レオリオはいいやつだからさ、見た目怖いかもだけど怖がらなくていいからね」

「そう言い残し彼女は出て行つた、入れ替わりで黒髪短髪の男性が部屋に入ってくる、彼がレオリオなのだろう。」

「あの……助けてくれてありがとうございました……」

「お、おう。大丈夫か？体はどこか痛いところとかないか？」

「ええ、大丈夫です、倒れた私をここまで運んで介抱してくださいましたようで、本当になんて言ったらいいか」

「そりや良かったぜ、オレはこう見えても医者志望でな、放っておけなかつただけだ、気にすんなよ」

レオリオはニカッと笑い笑顔を作る、なるほど、いい人なのだとわかった。

「そういつてもらえると助かります」

自分も負けじと笑顔を作つて返す、レオリオの顔が真っ赤になった、何故だ？

しばらくレオリオに軽い診察をして貰い、異常は何もないと判断された、レオリオも安心した様子だった。

そしてその時に気付いたのだが自分は女だった、なぜか自分は男なんだと思い込んでいたが女だった、違和感はあるがそもそも女だったと言われても納得できるくらいの軽いものだ。

ただ自分のことは「俺」と言っていたと思ひ出せるし、神様からも君付けで呼ばれて

いたと思う、うーん謎だ。あ．．．あれ？自分女だったら結婚の約束は．．．？あれれ？

そんなことを考えているとレオリオが自己紹介を始めだした

「遅れましてだがオレの名はレオリオ、医者志望の19歳だ、名前を覚えてもらえるか？」

俺口調では女としてはおかしいかな？と思い女性のようない口調になるように自己紹介をした、ただし年齢も詳しく思い出せないので拙いものだったが。

「えーっと、私はイブキ、生まれは日本．．．だと思う」

生まれも思い出せていなかったが、口からスツと日本という単語が出てきた、変な感覚だ。

「ニッポンか、どつかで聞いたこともある気がするが思い出せねえな．．．悪いな不勉強で」

「ううん、たぶん．．．すごく遠い場所だと思うからしようがないと思います」

「イブキさんはどこから来たんだ？この街に住んでるわけじゃないんだろ？やっぱり船か？泊まっているところは？」

レオリオが当然の疑問を投げかける、事実レオリオは宿があるのであればそこまで送り届けるつもりだった。

イブキは少し考えた後、難しい顔をして言った

「ごめん、全然覚えてないんだ・・・」

レオリオは呆然とした、おそらくイブキは記憶喪失になってしまっている、記憶の混濁は意識を飛ばした人物には見られてもおかしくないのだが……。これではとてもじゃないがここからは出せないだろう。

「…なあ、イブキさんよ、俺の部屋でよければ使ってもらっていい、しばらくここにいてくれないか？」

レオリオの言葉は自分を心配しての言葉なのであろう、本当にお人よしだなこの人は、しかし自分は普通の記憶喪失ではない、転生しているのだ。記憶を忘れていてもおかしくないと考えていた、思い出すこともおそろくないだろう。

…レオリオの言葉は素直にありがたかった、だからこう返した。

「ありがとうございます、でも平気ですよ、アテがないわけじゃないんです。生きていくくらいはできますから」

レオリオは苦い顔をしたが、そうか・・・と言い椅子へと腰掛けた、人の善意を断つてしまい、少し悪いことをしてしまったという罪悪感が胸を痛める。

——その時、レオリオの部屋のドアが勢いよく開かれた、見ると顔面蒼白の女性が立っていた、介抱してくれていた彼女だった。

「レオリオ！すぐに来て！診てもらいたいの！お願い！どうしよう・・・どうすればいいの・・・」

レオリオは彼女の尋常ではない様子に医療品の入ったカバンをまとめすぐに出かける準備を始めた。

「イブキさんはここにいてくれ、オレが帰ってくるまでここを自由に使ってくれていい、寝れるのであればここで寝ていてくれ」

「私もついていきます、彼女の様子はとても見られたものじゃありません！私はもう大丈夫です！彼女に付き添います！」

彼女は明らかに様子がおかしい、何か自分でも役に立つかもしれないと思うとイブキはじつとしてはいられなかった。

結局、事は一刻を争うかもしれないと判断したレオリオがここで問答する時間を嫌ったため仕方なくイブキの同行を許可した。

「・・・わかった、でも無茶するなよ、ついてきな」
「はい！」

3人で部屋から出て、大急ぎで泣き顔の彼女が先導する場所へと向かうのであった。

向かった先は大きな宿屋、3人で飛び込む。そのの一室に青年がベッドに横たわっていた。

それを見たレオリオの顔色が変わる、まさか、と思つた。この病氣については誰よりも知つているし調べもした。

「嘘だろ……いやまだそうと決まつたわけじゃねえ！」

レオリオは青年を必死に診察した、今朝はあんなに元気だつたじゃねえか、2人でアホ話をしながら、冷やかされながら、俺の部屋に一緒にイブキさんを運んだじゃねえか。

「嘘だ……！嘘だろ！！嘘だと言つてくれよ！！」

レオリオから大粒の涙が流れる、それを見た青年の彼女の目からも涙が流れる。

彼女からどこか諦めたように声が発せられた。

「やっぱり……あの病氣なのね……」

2人にとつては悪い夢以外の何物でもない、よく知つている病。以前にレオリオの親友がかかったあの病氣。決して治らなかつた、いや治せなかつたあの病氣。それと同じ症状が青年にも見られたのだ。

その時もお金足りなくて治せなかつた、よく知つている、いくらかかるのかを、青年の宿屋、青年の両親のお金、自分たちのお金すべて集めても賄えない莫大な治療費。

「なんでだ・・・なんでこんな・・・うあああああああああ!!!」

レオリオは咆哮した、自分の無力さに、自分の不甲斐なさに、まだ医者になれていない自分に対して怒りが収まらなかった。

夜になってもレオリオは必死に看病を続けていた、青年の両親が呼んできた医者にも見せたが、やはりあの病気であると診断された。

青年の両親は彼女に今日はレオリオに任せてもう休んだほうがいいと促した。青年の両親も泣いていた。

青年の両親は泣き崩れて倒れてしまった青年の彼女を他の空き部屋へと連れて出て行った。

私はレオリオのことが心配になり声をかける。

「レオリオさん・・・私が代わります、少し休んでください」

「イブキさんか、いや休んでなんていらねえ…。この病気は莫大な金がかかる手術を受けさせるか、薬を使わないとこの病気は治らないのは知っている、薬なんて同じ量の

黄金よりも高いんだぜ？笑っちまうだろ？…でもな、今オレが頑張れば進行を遅らせることはできるかもしれないねえんだ、やれることはやるさ。」

レオリオはなおも必死に青年を看病し続けている、しかしその目はどこか諦めているようにも見えた。しかしそう見えたのは一瞬だけで彼は気力を取り戻し目を閉じている青年を励まし続けた。

「起きろよ…！起きてくれよ…もう嫌なんだよ…昔みたいにバカやつてさ…また一緒に酒飲もうぜ」

レオリオは青年に呼び掛け続ける、しかし青年は起きない。起きてくれない。

…やがてレオリオの体力に限界が来た、レオリオは青年のベッドに顔を伏せて眠り込んでしまった。

———後は任せて、レオリオ。

—————
チュン・・・チュン・・・

「おはよう、レオリオ」

「おー、おはよーさん」

朝になり、青年とレオリオは挨拶を交わす、いつもランニングが終わった帰り道に出会うため毎朝行われる会話、いつも通りの挨拶だ。

—————
レオリオは飛び起きる。

「お前!?!体はなんともないのか?!病気は!!?!なんで起きてるんだ!?!」

「え?体?ああ、仕事中に急に倒れたことは知っているけど、働きすぎだったのかなあ?以前よりも体は快調だよ、よく寝たからかな?心配かけてごめんねレオリオ?」

信じられない・・・という目をするレオリオ、そして青年はレオリオに告げる。

「レオリオが寝ている間に倒れていた彼女・・・イブキさんとも話したよ、ありがとうって言われちゃった、僕はなんにもしていないのにな」

ありえない・・・あの病気を治せるなんて・・・いや、治せる薬は確かに存在はする、そかしここにはあるはずがないものだ、なのだが・・・いやまさか・・・!

「レオリオ?どうしたのさ?」

青年は首を傾げてレオリオに問いかける

「そうだ！イブキさんはどこに行ったんだ！」

この場にイブキの姿はない、オレが治したとは到底思えない、あの病がそんな簡単に治らないことは誰よりも知っている。あるとすれば何かをしたのはイブキなのだろう、イブキに会って話を聞きたい。

「イブキさんなら外の空気を吸ってくるって……あつ！レオリオ！」

レオリオは駆け出した、イブキに話を聞くために。そして宿屋から出てすぐの裏路地、宿屋の備品を置いている倉庫の近くで伸びをしているイブキを見つけ駆け寄った。

「イブキさん！」

「あ、レオリオさん、おはようございます」

「あいつを治したのはイブキさんなのか!？」

私はふう……と一つ息を吐いて言った。

「内緒です」

「頼む！教えてくれ！」

うーんどうしようかと私は悩む、本当のことは説明が難しくなるから言うつもりはないしね。

結局イブキはまあ信じてもらえないだろうと思いつつ、少しとぼけてみることにした。「…もし私が流れ物の医者だつて言ったらあなたは信じてくれますか？」

「信じる!!!あの薬はオレには絶対に手にできないもんだ!」

少し意外だったがあつさりとしてレオリオは信じてくれた、イブキもそれに乗る。

「・・・そうですか、確かに彼を治したのは私ですよ」

「やっぱりか!・・・あの薬は高価なものだ、無償で渡せるようなものでもねえって知ってる。宿屋を売り払っても稼げないほどの額がかかるシロモノだ。それなのになんて使ってくれたんだ?」

イブキはうーん、と小首をかしげるポーズで考える、そしてレオリオに笑顔で言った「困っている人がいたら、助けるのが助けられる力を持つ人の義務だと思います、それに私は人を助けられるんだつたらお金なんていららないですよ、私の使命だとも思っています」

レオリオは感激した、オレの目指すものを実現している人がいる、レオリオはまた涙した。・・・この出会いに感謝して。

イブキは脳内で（ブック）を唱えてカードリストを見た。そのカードは使用回数が一つ減っている。…それは一人の人を助けた証拠。

『No. 017 女神の息吹 SS-02』 一度だけ瀕死の重傷、不治の病、肉体疲労、なんでも一息で治せるようになる。ただし念が込められたものや強力な呪いの類には効果はない。

その液体は白くてドロドロしててコクのある

「本当になんとお礼をしてしていいものか・・・ありがとうございます・・・」

イブキは青年の両親にひたすら頭を下げられていた。青年の様子を見に来た両親が息子の元気な姿を見て驚き、事情を聴くためレオリオを探しに来たのだ。そして一緒にいたイブキが医者であり、病気を治したことをレオリオから伝えられたのだった。

もう何回頭を下げられたのだろうか…。わかりましたから頭を上げてください…！もういいですから頭を上げてよう…!!と言ってもずっとこの調子だ、誰か助けて。

私が困っているとレオリオが助け船を出してくれた。

「とりあえず中に入ろうぜ、あいつにも話してやらねーと」

泣き崩れて部屋で寝込んでいる青年の彼女を思い出したのだろうか、両親は頭を下げるのをやめ、一度宿屋の中へと入り彼女を呼ぶことにしてくれた。ナイスだレオリオ。

宿屋の中に入り、青年が寝ている部屋へと入る。しばらくしてレオリオに連れられて来た彼女は酷い顔をしていたが青年の姿を見るや否や驚きの表情を浮かべた後、青年に抱き着いていた、そんな彼女を青年は優しく抱きしめる。

「心配かけてごめんね…。ぶっ、アハハッ…！ひどい顔だよ。」

「うっ…うっううう…バカバカツ！もう助からないかと思つたじゃない…!!」
「ごめんね…ごめん…」

一しきり彼女が泣き、場が落ち着いた後、青年は病み上がりのためしばらくはここで寝ていてもらおうと私が提案した。そして泣き止んだ彼女を連れ出し、青年の両親と彼女、レオリオと私の5人で宿屋の空き部屋で話をすることにした。

私は青年の彼女にも自分が医者であるということとを告げると、この場にいる全員に彼の病氣のことについて「青年は過労で倒れた」ということにしてもらうことにした。

実際1日で治ってしまっているのだ、あの病氣だったということは彼自身は気が付かないだろう。余計な心配をさせないためにも、とお願いをしたら4人とも了承してくれた。

「だが本当にいいのか？ここに居る皆は昔のことがあるから知っているとと思うがあの薬はとても高価な物だ。手術で治すよりも何倍も金がかかる。イブキさんがどうして持ったのかは知らねえがそれを手に入れるためにはかなりの大金を使つたんだろ？あの薬はオレでは絶対に手に入れられないシロモノだ。存在は知っているが利権が絡んでんのか知らねえがあるクソツタレ企業が独占してパイプのある金持ちか特別な病院か医者以外手に入れられねえもんだぜ、…本当にいいのかよ？」

レオリオが再度確認してくる。レオリオから発せられた言葉は事実なのだろう、しか

し私は薬を使ったわけではないしその存在を知っていたわけではない、『女神の息吹』を使って治しただけなのだ。それに人助けは神様との約束、それは覚えているし私がこの世界ですべき義務だとも思っている。

レオリオ以外は不安げな顔をし、レオリオはどこか申し訳なさそうに、皆一緒に私の顔を伺っている。

「お金のことでしたら心配しないでください、それに先に助けられたのは私の方なんですよ？彼は気を失ってしまった私を助けてくれたんです。それのお返しということはどうでしょう？」

そう告げると青年の彼女が抱き着いてきた、おお：彼女の子ぶりながらも張りのあるお胸様が当たつとるでえ……マズ：自分のお胸の感覚と融合してトリップしそう。たゆゆん。

「イブキさん……ありがとう……本当にありがとう……」

しばし彼女の柔らかさを堪能していると青年の両親がまた頭を下げようとしてきた、マズイ……！お胸様に気を取られている隙に無限ループが始まるところだった。私は先手を打った。

「あの、もし何かお礼をしようと思ってくれているんだったら、私をしばらくここに泊めてくれませんか？」

青年の両親は顔を見合わせ、そんなことでいいのなら泊まってく下さい、なんならずつといてくれて構わないと頭を下げたのだった。よかった今回は一回で終わった。。。

——青年の病についてはもうほとんど治っているししばらく私が診るからもう心配はないという話をしたり、病み上がりには栄養が必要だからこういう料理を作つてあげてくださいなどという話をしていると、昼を食べていないことに気が付いた母親のほうで青年と私たちに料理を運んでくると言い出でいった、父親のほうもイブキに使つてもらふ部屋のカギを取つてくると言い残し出て行った。

・・・現実には青年は『女神の息吹』で元気いっぱいなのだが、薬飲んですぐ治るとは誰も思っていないだろう、定期的に私が責任もつて診察しよう、いや実際は診察しているフリなのだが。。。

帰つてきた父親から部屋のカギを戴いた私は母親が持つてきてくれた簡単な食事をレオリオ達とともに食べた、私たちの分はハムレタスサンドイッチだった、うん、おいしい。青年の両親は仕事に戻ると告げ、彼女も一度家に帰ると言つたため別れた。

∴残されたのはレオリオと私。

レオリオは真剣な表情で私に話しかけてきた。

「なあ、イブキさんみてーな医者になるにはどうしたらいいと思う？」

∴私はしばし考える、私は医者のことなんてわからない、ただ治せる能力を持つてい
るだけなのだ。

「医者になる方法を聞いているんだつたら私は遠い国から来たからこの国でレオリオさ
んがどうやったたら医者になれるかどうかは答えられない、だけれども、大事なものはレオ
リオさん自身が力をつけること∴かな？勉強もそうだけど力が無いと助けられないの
は事実だしね。私は今の自分にすべてを救う力が無いことはわかってる、けれども救え
るものは全員救いたい、そのために力をつけなきゃいけないって思ってるよ、
ごめんね大したこと言えなくて∴」

その言葉を聞いたレオリオは一度頷き、参考になったよ、サンキューなイブキさんと
言うと、彼が持つてきていた医療品の入ったカバンを開いた、そして中から一枚のカ
ードを取り出した。

私はそれをレオリオの後ろに回って覗き見るとそこにはこう書かれていた。

「∴ハンター試験応募カード？」

これは何なのか？とレオリオに尋ねるとハンターについて声を大にして教えてくれ
た。

曰くこの試験に合格してもらえらるライセンスカードがあれば所有しているだけで富

と名声が得られること、売るだけで七代遊んで暮らせること、あらゆる国への入国がフリーパスになること、公共施設もタダになること、レオリオが医者になるためのお金が手に入ること……、それがあれば私が使ったという薬を買い求めること……、その試験は死傷者が出るほどとても厳しいものになるであろうこと……

レオリオはやはりハンターになるしか医者になる道はない、と私に宣言し申し込みのためカードに記入を始めた。……私はレオリオに「応援するよ」と声をかけ部屋を出た。

私はレオリオがハンター試験を受けることに反対はしない、それは彼が決めたことだ、レオリオ自身が力を付けることはとても大事だと思う。……でもねレオリオ、私は君を絶対に死なせないよ？……君も私は助けたいんだ。

私は夕飯までには戻るからと受付にいた父親に言い残し街の地図をもらって宿屋を出た、転生してから色々あってできていなかったがまだまだ試しておきたいことがある、夕飯までの時間を能力の実験に使うことにした。

地図を見て、道行く人に道を聞き、この世界に最初に降り立った場所へと戻ってきた、人は少ないが船が見える。注意深く周りの人から見えないよう遮蔽物に囲まれた岩陰

へと入る、これで周りからも見えないだろう。

まずは女神の不在証明を使い体を透明化してみた、うん、問題なく使える。しつかり30秒で息切れしてしまったが。

次に女神の共犯者を使ったかったが対象がいらない、しばらくこの能力のテストはできなさそうだ、協力者がいれば使えるがうまく説明できる気がしない。うーん、保留！

次に「私だけのG・I」を使い石を取り出して女神の秘匿を使い石を透明化してみることにした。これは無事成功したものの少し疲れた、思ったよりもこの能力は消耗するようだ。

透明化した石を破壊してみようとさらに大きな石を持ち上げ透明化している石の場所へと落とす、——パキヤツつと音を立てて透明のまま消え去った、かけらも残っていない。

そこらへんに落ちている石でも同じことを試したが結果は失敗、自分のものではないと判定され使えなかったようだ。しかし石をポケットに入れて自分の物だと思い込み使用してみたら使えた。うん、この世界のものでも使えることが分かった。

判定がどのくらいのものまで有効なのか色々試したが大きな岩を抱えて自分のものだと思っても使用できなかった、ポケットに入るサイズくらいが限界なのかな？要検証

だな。

ここまでで少し長く時間を使ってしまったためいったんこの能力の考察は止めて【私だけのG・I】を使いスperlカードの検証を試みることにした。

盗視（ステイル・対象プレイヤー1名のフリーポケットを全て見る）を使うも選択する対象がいいため消えてしまった

念視（サイトビジョン・対象プレイヤー1名のカードデータを全て見る）を使ってみる、私のしか見られない：

衝突（コリジョン・会ったことのないプレイヤーのいる場所へ飛ぶ）も発動せず。

どうやら検証してみた結果スperlカード40種類のうち使えそうなのは3分の1程度くらいだろう事が分かった、【私だけのG・I】はその名の通り私しかもっていないため対象が別にある場合は使えないのだろう。ちくしょー。

最後に漂流（ドリフト・行ったことのない街へ飛ぶ）を使ってみる、私の読み通りならこれは使えるはずだ。息を止め姿を消してから使うと体が引っ張られる感覚の後しっかりと別の場所に転移していた。人がまばらだ、周りを見るに砂漠地帯の街だろうか？

誰かに見られないよう息が切れないうちに初心（デパーチャー・対象プレイヤー1名をスタート地点へ飛ばす）を使いスタート地点へと戻ろうと試みる、狙い通りさつきま

でいた場所付近へと帰ってこられた。石でできた堤防の上だ。

文字通り一息ついて休憩した後、また女神の秘匿をテストした。結果は上々かもしれない。【私だけのG・I】で出したものと多少大きめのものでも消せることが分かったし、この世界のものでも自分のものだど認識さえすれば小さなものは消せる、この世界のもので消せた最大のものは海のそばに落ちていた懐中電灯だった、ちなみにタイヤは無理だった。

消耗の度合いには大きさは関係ないようだった、懐中電灯と石で同じくらい消耗してしまったので1回につき一定数消費するのだろうか。

…そろそろ日が沈み始める時間になったため能力テストを切り上げて帰ることにした、帰る前に【私だけのG・I】を使い10000Jを10枚呼び出して現金を持っておく。帰りがてら薬と適当に服を何種類か買った、神様との会話でわかつてはいたが呼び出したお金も普通に使えることが分かった、ちゃんと通し番号も違うし汚れも適度についている、どういう理屈かはわからないが偽札ではなくちゃんとしたこの世界のお金なのだろう、少し安心した。

宿屋に帰ったら薬と一緒に買った安めの栄養剤を青年に会いに行つて診察ついでに飲ませよう・・・まあ青年はこれ以上元気になりようはないのだが。

宿屋に帰ると、夕飯の用意ができていますよ。と出かける前と同じく受付にいた青年の

父親から告げられる、部屋に入り買ってきた服に着替えたあと食堂へと向かった。
…夕食はおいしそうな、細かく切った具がたっぷりのに優しいシチューだった。

いただきます。